

## 令和元年度 第3回滋賀県公立大学法人評価委員会開催結果（概要）

日 時 令和元年8月1日（木）  
13時55分～15時55分  
場 所 滋賀県庁 4-A会議室

【出席委員】 北野委員（委員長）、磯田委員、清水委員、前野委員

【事務局】 前田私学・県立大学振興課長、他関係職員

【県立大学】 廣川理事長（学長）、青木副理事長、倉茂理事、山根理事、高橋理事、  
久保田事務局次長、他関係職員

○開会

○委員会の進め方について

・委員会の進め方について、事務局から説明

【議 題】

### 1. 公立大学法人滋賀県立大学の役員報酬の支給基準について

（委員長）それでは、早速ですが、次第に入ります。公立大学法人滋賀県立大学の役員報酬の支給基準について、まず、事務局から内容を説明していただきます。

・公立大学法人滋賀県立大学の役員報酬の支給基準について、事務局から説明

（委員長）ありがとうございます。ただいまの説明について、御質問、御意見等ありますでしょうか。

（委員長）これは、県の特別職の基準と連動した枠組みの中での支給基準と聞いています。よろしいでしょうか。

（ 異議なし ）

（委員長）ありがとうございます。それでは、本委員会としては、意見なしとお認めいただきました。事務局の方でも意見なしということで、処理をお願いします。

### 2. 平成30事業年度における業務の実績に関する評価について

（委員長）次は、議題2の「平成30事業年度における業務の実績に関する評価」についてです。前回も、いろんな観点から活発に議論いただき、自己評価と評価の案とで異なる部分について集中的に御議論いただきましたが、計画の文言と自己評価の記述が分かり難くて評価が下が

っている点が見られました。大学から追加で説明をいただき、思い違いがあるようであれば、評価を考えてもいいのではないかとということで、大学の考え方を求めていますので、御説明をよろしくをお願いします。

・追加説明事項について、大学から説明

(委員長) 引き続き、事務局から論点整理資料について説明をお願いします。

・論点整理資料の修正および評価の案について、事務局から説明

(委員長) ありがとうございます。それでは、気付かれたことなど、出していただければと思います。いかがでしょうか。

(委員) 長寿命化の件ですが、棟によって印がついていないところはということでしょうか。

(大学) 基本的に、古いところから順番にやっていますので、例えば人間看護学部棟は新しいので、この期間中に受変電設備は手を入れなくていいので印がついていないといったことです。

(委員) A棟で中央監視設備に印がついていないのは、既に終わっているということですか。

(大学) はい、あくまでもこの10年間に入っているものになります。

(委員) この中には、省エネやエコキャンパスといった考え方は入っているのですか。

(大学) 例えば、空調では、現在は全館空調ですが、計画では個別管理で必要な分だけ使えるので、省エネもできると考えております。機器自体も新しくなりますので、そういう点での省エネもあると考えております。

(委員長) それでは、評価を変える話ですが、計画番号の23番、エンrollment・マネジメント(EM)についてですが、いかがでしょうか。

(委員長) 計画は、EMに関する他大学の取組を調査をするという計画ですが、IRとEMは切り離せないという一方、評価案は切り離して、という立場で書かれています。基本的には、十分当初の計画はできていると思いますが、いかがでしょうか。あくまでも、具体的な取組は今年度からで、その準備段階を30年度にされたということですか。

(委員) 改めて文章として整理して報告していただき、IRとEMが密接不可分の関係でどちらも進めていかないといけないということが分かったので、計画とは異なるニュアンスの報告となりますが、結果的には当初の目的を達成するものとして進んでいるということでしたので、自己評価を認めていいのではないかと改めて思いました。

(委員) ここから先が大変です。これからどうするかというのが難しいと思います。

(委員) 1年目としては成果があり、今後については実績を見させていただくということではないでしょうか。

(委員) 今、データはそれぞれが電子的に持っており、それを処理するツールも出回っていますが、実際には、事務のファクターで縦割りになっているなど、全体で使うにはデータが整備されていません。そこに手を入れていくのが大変だったり、高度な個人情報が含まれていて、それをどう見えないようにしていくか、など、実際にやっていくと大変なことが多いのですが、出発点には立たれているということです。

(委員長) よろしければ、この項目の評価はⅢに戻すということによろしいでしょうか。

( 異議なし )

(委員長) はい。次は35番です。地域へ研究成果を発信していくという中期計画の中で、学部横断研究交流会をオープンキャンパスの機会にされたということです。オープンキャンパスが、高校生への大学の紹介というイメージで不十分ではないか、という評価案でしたが、実際に聞いてみると、全学の教員がシェアしたり、高校生の保護者が聞くことができたということで、当初の計画を十分満たしていると考えているという説明がありました。また、機関リポジトリに掲載し、学内外から閲覧できるようにした、という説明でした。これについて、いかがでしょうか。

(委員) これぐらいしていたのではないのか、という目で見ると、それぐらいで、という印象を受けますが、大学内は研究分野が閉鎖的で、横断的に結び付けることは壁があるものだという目で見れば、それぞれの研究分野を見る大きな一歩になったということも理解できるので、そういう意味では、当初の大学の評価もあり得るということは理解しました。

(委員) 県内外の実態はどれぐらいでしょうか。学生、保護者、地域住民、産業界等がどれぐらいの割合で来られているのでしょうか。大学も、産業界や保護者、学生に、多少、広告費をかけてでも、県内外を問わずアピールしないといけないと思います。

(委員) オープンキャンパスというと、高校生を対象に組み立てるのですが、本来はオープンハウスのようなもので、呼びかけの対象ももう少し広くとらえてもいいかもしれません。その辺りの方向付けはどうでしょうか。

(大学) 昨年度のオープンキャンパスへの参加者のデータを紹介します。全体の80%は、滋賀、京都、岐阜、大阪、愛知、兵庫で、滋賀は、全体の34%しかいません。それ以外は、京都、岐阜、大阪、愛知、兵庫、福井、静岡、三重、石川、奈良、和歌山、その他となっております。北

海道からも来ています。5,300人中、2,300人ぐらいが保護者です。

(委員) 保護者が、子どもの将来も含めて非常に関心が高いです。また、共同研究とありましたが、オープンキャンパスの機会に、産業界からも見ていくというようにつながっていくと思いますし、保護者の中にも、そのような方もおり、興味があるからよく見て行かれると思います。

(委員) 参加者にアンケートをとって、経年の動向を調査してもいいのではないのでしょうか。

(大学) 今年のオープンキャンパスでアンケートをとっており、参加された方の43%が受験生で、残りが保護者や教員でした。ポスター発表に対しては、97%が、よかった、まあよかったという評価をしており、継続してほしいという評価は、ほぼ100%でした。自由記入では、非常に面白かった、役に立つ研究があった、といった記述がありました。

(委員) それだけでも、成果となるのではないのでしょうか。

(委員) あまり多く書いてもらうと負担になります。産業界の人と連携するために、もっと宣伝し、長いスパンで取り組まれるといいと思います。

(委員) 来場者の中身も、変化してくるかもしれません。

(委員) 受験生のためのオープンキャンパスではなく、県立大学のキャンパスをオープンにし、研究成果なども聞けます、ということです。

(委員) 何年か先には、ジョイントで論文が出る、といったことにつながるといいと思い、継続的に見ていくといいと思います。

(委員) 今まで認識していませんでしたが、農場もお持ちです。日本の農政は、改革されていますが、重要な産業だと思います。オープンキャンパスは、チャンスだと思います。農業高校は、毎月、作ったものを販売し、得た利益は予算として戻ってきています。是非、そういうように結び付けていただければと思います。

(委員長) ありがとうございます。オープンキャンパスを活性化していくということで、有意義なディスカッションができたと思います。そういったことで、評価としてもⅢに変えるということでもよろしいでしょうか。

( 異議なし )

(委員長) それでは、これはⅢといたします。

(委員) リポジトリのダウンロード状況などは見えていますか。

(委員) そこまではできていません。

(委員) 関心度を測れているものが見えてくるので、やっていただければいいと思います。

(委員長) 次に、計画番号 50 番ですが、御議論をお願いしたいと思います。

(委員長) この件は、他の項目でも評価しており、ダブルカウント的になっていますので、IVとするのは困難な状況かと思っています。この件とは別に、一般的な生涯教育プログラムを充実させていく方向性について、教えていただけますか。

(大学) 社会人や一般の方向けの教育プログラムでは、幅広いメニューを用意しています。今回は、職業的キャリアアップという年度計画ですから看護分野を書いています。一般の生涯学習では、公開講義や公開講座、講演などを用意しています。この中ではアンケートをとっており、ニーズの高いものや、より参加しやすいものになるよう考えていきたいと思っています。

(委員) 高度実践看護師教育課程の認定を受けることは、どれくらい大変なことなのでしょうか。

(大学) 県内では初めてです。

(委員) 認定を受けたことは素晴らしいことだと思いますが、認定を受けたから評価IVです、というのは、飛びすぎていると思います。認定を受けたことで、来年からの社会人教育が飛躍的に伸びるという位置付けであれば評価IVも納得ですが、認定があっただけでは、計画の中身に直接つながるものか疑問です。この計画の中での認定を受けた価値がどれくらいなのか、知りたいと思いました。

(委員) ちょっと範囲が狭く感じます。認定は受けたが定員は4名で、実際の入学は来年度からということで、プロフェッショナルなことをされようとしていると思いますが、そもそも、多様な人々に、地域貢献、健康寿命といった幅広いことをしようとしている中で、狭い感じがしますし、一般の方を対象にした幅広い面で何かあればと思います。

(委員) 今はどこの大学も、社会人教育をどうするかということが求められています。従来から個別にはやってきていますが、大学全体としての考え方、将来的にどういう分野を充実させていくのか、どういうタイプのプログラムを充実させていくのか、ポリシーや考え方を出して、それにある程度従ってステップアップしていかないと、個別に出していくとつらいことがあります。少し、そういうことを考える時期でありますし、今後の評価につながっていくので、もうすこし戦略的なレイヤーで考える方がいいのではないかと思います。文部科学省の履修証明プログラムという制度があり、その辺りのニーズを拾い、オンラインもありだと思えますが、デザインしていく必要があると思います。現実にやろうとすると難しいこともあります。

(委員) 地域のニーズはあるのですか。

(大学) プログラムとしてやっているものはありますが、それをどう位置付けてリンクしているか、抜本的に整理したいと思います。

(委員長) いろいろな契機で提供していますが、大学全体では把握していないし、必ずしも十分ではないので、将来、戦略として取り組むということで、この項目については、このままとすることよろしいでしょうか。

( 異議なし )

(委員長) ありがとうございます。修正内容について、事務局から説明してください。

・評価案の修正内容について、事務局から説明

(委員長) よろしいでしょうか。では、そのように整理したいと思います。その他、細かい修正が入るかもしれませんが、本職に一任をお願いしたいと思います。そうしましたら、折角の機会ですので、全体的に御意見をいただければと思います。

(委員) 最近、蛍光灯を業者に処分してもらうにも、年に1回、会社の担当者が最終処分場を訪問しなければいけません。処分のコストが年々上がっていきますので、注意していただきたいと思います。また、LEDライトに変わっていきっていますが、トイレや廊下など、常につけておく必要がないエリアについては、センサー付きにした方がいいと思います。

(委員) 石油製品は、かなりの割合で循環できるようになったという話を聞きました。大学もそういう取組をされているので、コストだけではなく、捨てる方がいいということにならないようにしていただきたいです。

(委員) 処理するコストは下がることはないのですが、捨てる方のコストについて注意しておいていただきたいと思います。

(大学) おっしゃるとおり、更新する場合、処分することが必要ですので、契約の中に処分についても入れて見積もっています。蛍光灯で言えば、PCBも、単独でしようとするの大変ですが、期限が来ているのでしなければなりません。こういうことも注意していきたいと思います。センサーについても、トイレはセンサーにしています。これからLED化を進めていく中で、できるだけ省エネに気を付けていきたいと思います。

(委員) 全部とはいかなくても、一部でも循環していけるように、廃材のフォローをしていただきたいと思います。石油製品については、かなりの再生率になっていると聞いています。

(大学) 工学部の教員で、廃プラを回収して、プリンターをつくり、それを企業が売る、ということまではやっています。

(委員) そういうことを利用したり、関連させたりということをしながらいながらの方が、大学の活動としてはいいのではないかと感じます。

(大学) 今年、空調の入札をしていますが、プロポーザル方式で、価格だけではなく、環境に配慮しているかなど、業者から提案してもらいながら契約するというをしています。そういう中で、そういう項目を入れるなどの検討も進めていきたいと思っています。

(委員) 消費電力のモニタリングがリアルタイムでできるようにすると、特にピークカットで効果が大きいです。

(委員) 土地の貸付けによる収入により海外に留学に行く学生に支援する取組をしていますが、これから、国内外を問わず、学生を集めなければいけません。県立大学なので滋賀県が優先かもしれませんが、コマーシャルも含めた活動をしていかなければならないと思います。

(委員) 18歳人口の減少はもっと早くやってきます。今のままの定員、学校制度だと、確実にレベルが下がります。下がるに任せるというやり方もありますが、しっかり教える、留学生や女性を多くとるなど、なにかを変えないとクオリティが下がります。しかし、学部生は日本語で教えているので、そのギャップをどう埋めるかが課題です。大学院は、研究中心なので、なんとかなり、中国からどんどん留学生が来るので、意外と多い状況です。学部は全然だめなので、各大学の課題だと思います。

(委員) 日本人は、4年で大学を卒業、3年で高校を卒業しなければならないという感覚です。海外の留学生に聞いてみると、6年間大学に行くつもりだったり、途中離れて復帰するなど様々で、日本もいずれそうなると思います。大学のインターンシップも2週間などではだめで、1年間休学して企業に行き、5年で大学を卒業するというように、企業も大学ももっとオープンにならないといけないと思います。

(委員) 高校生は、浪人したがらず、大学を卒業し、4月一括採用の例に倣うというのが問題だと思います。現実には、大企業も4月一括採用に頼っており、一方では通年採用と言っている、いろんなちぐはぐさが、大学の教育に影響しています。留学生をどうするかは大きな問題で、国立大学でも、定員をどうするのか、減らせという圧力が強く、それは私学との関係性もあるかと思いますが、学生を減らすと教員も減らせと言われます。18歳人口が減ることは決まっていますから、社会人教育に振り向けていくなど、戦略的に大学の在り方、教育の在り方を考えていく必要があります。

(委員) 単位互換について、学生は興味があることを聞きに行こうとしても、単位認定がなければ

入れてもらえないことがあります。広く単位が取れるといいと思います。

(大学) 本学では、自分の学部学科以外の科目の履修を開学当時から卒業単位に認めています。学科により異なりますが、総単位のうち 10 単位程度を履修できます。

(委員) 外の大学も含めて、単位互換が広く認められればいいと思います。加えて、インターンシップも 1 年間ぐらい行き、それに対しても単位が認定されるなど、学生次第でもっと自由に組めるようにして、学部学科間の縦割りの中でも様々なことを学ぶことができるようにしてもいいのではないかと思います。

(大学) 専門は専門として学んでいただき、専門プラスアルファの教養的な部分について、本学が提供できない科目は滋賀大学と単位互換するなどしていますが、地理的な問題もあり、なかなか学生が行って来ません。また、本学では、副専攻というものを設けており、総合的にいろんなことが関わってくる学びもありますので、そういう部分にも動機付けて入っていければ、自分の専門だけではなく横の広がりができるのではないかと思います。

(委員) 今後、社会人になったときに、広い視野やキャリアに対する自分の考えを確立させるためには、自由度を高めておくことにより、自主性のある社会人が育つのではないかと思います。

(委員) 大学でも、副専攻や横に広げる努力をしていますが、学生の方が積極的に幅を広げることが案外だめで、卒業単位に到達することに集中しており、何を学ぶか、将来的に何が役に立つのかということあまり考えて来ません。卒業に必要な 130 単位だと隙間があるので、そういう隙間をやったと言えることに使う方がいいのではないかと思います。

(委員) 就職の際に、企業の側も、何をして、何を学んでどういうところにつなげたいと思うかということ聞いてあげて重視するようになると、そういう方向に行くのではないかと思います。

(委員) そういうことを問うようになってきています。

(委員) 問わなくても書いてあるという状況をつくり、成績だけでなく何をやってきたか証明する仕組みをつくらないといけません。

(委員) 今は本当に人手不足なので、何人来てくれるか、何人内諾をもらえるかという状況です。大企業だけではなく中小企業でも定年延長してしのいできましたが、やむを得ず人を入れ換えないといけない、外国人を入れていく、という状況です。

(委員) 在学中に、企業と一緒に研究や課題解決をするということがあれば、実務につながるのではないかと思います。



(委員) 半年で辞めてしまう人が多いです。3年続けば大丈夫です。学生の時に見たイメージと、実際に働いたときのすり合わせを十分やっているつもりですが、6月ぐらいに辞めてしまう人が多いです。ですので、インターンシップをもっとすればいいと思います。

(委員) 1年間のインターンシップは、流石に難しいです。夏休み、春休みぐらいだと、授業に直接影響なくでき、1か月でもずいぶん違うと思います。

(委員) 少なくとも、仕事はそんなに面白いことばかりではないということだけは学んで帰っていると思います。半年ぐらいで辞めた人に聞くと、企画をやりたいと言って入ったのに、営業や総務など、関係ないところばかりに配属になって、約束が違うから辞めた、という話を聞きます。会社としてはいろんなことを経験してほしいということだと思いますが、そこが新入社員には分からなくて有為な人材をこぼしている可能性があります。個性のはき違えをしている学生もあり、そういうことをインターンシップで感じ取ることができればいいと思います。

(委員) OBの社会人によるジョブ交座をやっておられますが、もっと活発にされてもいいのではないかと思います。

(大学) 企業の方に来ていただき、学生とやり取りしています。

(委員) インターンシップの逆バージョンで、会社に就職後、半年間大学に戻したり、特定の講座を受講させたりという交流があっても、学生にとって刺激になるのではないかと思います。

(委員) 大学院博士課程の学生のインターンシップに取り組んでおり、2か月を目安にやっています。事前にしっかりとマッチングをして実施すると、一仕事して戻ってきますので、それぐらいの期間がいいのではないかと思います。帰ってくると、顔つきや時間の使い方が変わり、安全の意識を身に付けて帰ってきます。

(委員) 本県の産業界では機械設計ができるエンジニアが不足しています。機械設計は、設計して実際にユーザーに渡るまでに半年かかり、それからフィードバックすると1年かかるので、その点が課題になっています。

(委員) そういった待機の時間があるので、休みを使って複数回行って成果を見るというやり方もいいのではないのでしょうか。

(委員) 高専を卒業して企業に入り、その後、大学や大学院に行く、という、学校と産業界のローテーションができればいいのではないかと思います。

(委員) そんなに非現実的ではないと思います。自分自身が、社会人になってから大学院に戻り、10年間、研究室に在籍しました。土曜や夜に集中的に学ぶカリキュラムがあれば、仕事をし

ながらも通えます。公務員で研究室に来ておられる方も多くいました。社会人で問題意識を持って大学に戻ってくると、同じ本を読んでも違うように見えてきます。学生に対する効果も見込めます。

(委員) 土日に授業をするのは難しいかもしれませんが、研究室は行けるかもしれません。今は長期履修制度というものがあり、3年のドクターの課程に4年かけ、授業料も3年分を分割して支払うということが制度上許されています。そういうものを活用すると、両立することもできると思います。出産、育児を含めてどうするかということは大学も議論しているので、そういう使い方もあるかもしれません。

(委員長) ありがとうございました。評価については、先ほどの修正を加えて、本委員会の評価したいと思います。この評価については、「滋賀県公立大学法人評価の基本方針」があり、評価結果の案を法人に示し、意見の申し立ての機会を設けるルールになっています。今後、その手続きに入りたいと思います。県立大学から意見が出る可能性もありますので、それに対する対応や字句修正等軽微な変更については、私に一任願いたいと思います。御希望があれば、再度招集させていただきます。よろしいでしょうか。

( 異議なし )

(委員長) 予定していた議題については全て終了しました。全体を通じて、なにかありますでしょうか。

(委員) 前回、数値目標のことについて言いましたが、バランススコアカードという方法があり、20年ぐらい前に提唱されています。当初は財務の数値が主たる評価で、例えばそれに加えて離職率を入れてとといったものでしたが、今は多様になってきています。公益法人でも数値目標を立てにくいということがありますが、それぞれの計画がうまくいったらこういう影響が出るのではないかとすることを複数挙げて、その到達度も含めて判断するということをしました。やりやすくなったり修正箇所が明確になったりと、いいこともありましたので、検討いただいてもいいのではないかと思います。

(委員) 教育では、客観評価と主観評価の両方を言われていて、迷うことがあります。総じて、数値目標にはなじみにくいものがありますが、モニタリング指標を設定することはいいと思います。

(委員) 指標を見つけるのが難しいですが、現場では、こうするとこの指標に影響するなどと、具体的に行動しやすくなります。

(委員) IRの目標も、一つにはそういうところもあり、何に注目するかが工夫のしどころです。モニタリングの指標に使うことは意味があります。

(委員長) ありがとうございます。これまで、3回委員会を開催してきて、その中で有用な御意見をいただきました。充実した評価委員会であったと思います。そうしましたら、進行を事務局にお返しいたします。

○閉会

- ・ 課長挨拶